

長崎小品

芥川龍之介

青空文庫

薄暗き硝子戸棚の中。絵画、陶器、唐皮、更紗、牙彫、鋳

金等種々の異国関係史料、処狭きまでに置き並べたるを見る。

初夏の午後。遙にちやるめらの音聞ゆ。

久しき沈黙の後、司馬江漢筆の蘭人、突然悲しげに歎息す。

古伊万里の茶碗に描かれたる甲比丹、（蘭人を顧みつつ）どう

したね？ 顔の色も大へん悪いやうだが――

蘭人、いえ、何でもありませんよ。唯ちつと頭痛がするもので

すから――

甲比丹、今日は妙に蒸暑いからね。

唐皮の花の間に止まれる鸚鵡、（横あひより甲比丹に）嘘で

すよ。甲比丹！ あの人の頭痛ではないのです。

甲比丹かぴたん、頭痛ではないと云ふと？

鸚鵡あうむ、恋愛ですよ。

蘭人、（鸚鵡を嚇おどしつつ）余計よけいな事を云ふな！

甲比丹（蘭人に）まあ黙もくつてゐ給へ。（鸚鵡に）さうして誰に惚おぼれてゐるのだい？

鸚鵡、あの女ですよ。ほら、あの阿蘭陀オランダ出来できの皿の中にある。

甲比丹、何時いつも扇あふを持つてゐる女か？

鸚鵡、ええ、あれです。あの女は顔こそ綺麗きれいですが、中々きぐら氣き位みが高いものですからね。

蘭人、（再び鸚鵡を嚇しつつ）こら、失礼な事を云ふな！

甲比丹、さうか？ それは気の毒だな。（金象嵌きんざうがんの小柄こづかの伴ば

天連てれんに）どうしたものでせう？ パアドレ！

伴天連ばてれん、さあ、婚礼はわたしがさせても好いいが、——何しろ阿オ

蘭陀ランダ生れだけに、あの女の横柄わうへいなのは評判だからね。

蘭人、どうかもう御心配なさらずに下さい。（やけ気味に）い

ざとなればあの種たねが島しまに、心臓を射抜いぬいて貰もらひますから。

種が島、（残念さうに）駄目だめだよ。僕は錆さびついてゐるから、

——サアベル式の日本刀にほんたうにでも頼み給へ。

牙彫げぼりの基督キリスト、（紫壇の十字架上に腕をひろげつつ）無分むぶんべつ別

な事をしてはいけない。ふだん云つて聞かせる通り、自殺などを

したものは波群葦増の門にはひられないからね。
（麻利耶観マリヤくわんの

音んに）お母様かあさま！ どうかしてやる訳には参りませんか？

麻利耶観音マリヤ、さうだね。ではわたしが頼んで見て上げようか？

伴天連、さう願へれば仕合せでございます。

甲比丹、どうか御尽力を願ひたいと存じますが、——（蘭人に）

君からもおん母に御頼みし給へ。

蘭人、（恥しげに）何なにぶん分よろしく御願ひ申します。

鸚鵡おめぐみ、御恵深い麻利耶様マリヤ！ わたしからもひとへに御願ひ致

します。

麻利耶観音オランダ、（阿蘭陀の皿えがに描かれたる女に）あなた！

阿蘭陀オランダの女、何か御用ですか？

麻利耶観音、はい、実はこの若い方があなたを御慕ひ申してゐるのださうですが、——

阿蘭陀の女、まあ嫌いやです事。わたしはあの方は大嫌ひでござい
ます。

麻利耶観音、それでも体さへ窶やつれる程、思ひ悩んでゐるやうで
すから、——

阿蘭陀の女、それはあの方の御勝手ごかつてではありませんか？ 一体
わたしは日本出来や支那出来の方は虫かたが好かないのです。

麻利耶観音マリヤくわんのん、そんな事を云ふものではありません。あの方
もあなたと同じやうに、西洋文明の命の火を胸の中に宿してゐる
のですもの。云はば兄弟のやうなものではありませんか？ どう

かわたしたち親子も願ひますから、少しは可哀さうだと思つてやつて下さい。

阿蘭陀オランダの女、（腹立たしげに）余計な事は仰有らずに下さい。

第一あなたさへ平戸あたりの田舎生れではありませんか？ 硝子ガラス

絵の窓だの噴水だの薔薇の花だの、壁にかける氈だの、——そんな物は見た事もありますまい。顔もあなたはわたしの国のおん母

麻利耶マリヤとは大違ひです。ましてあの方を御覧なさい。成程なるほどあの

方もこの国では、阿蘭陀人オランダと云ふかも知れませんが。しかしほんた

うは阿蘭陀人どころか、日本人とも西洋人ともつかない、つまり

この国の画描きの拵こしらへた、黒ん坊よりも気味の悪い人です。

蘭人、ああ、何と云ふ情ない言葉だ！（涕泣ていきふす）

阿蘭陀の女、（なほ怒の静まらざる如く）それがわたしを慕つてゐる、——よくまあそんな事が云はれたものです。おまけにあなたの方の一家一族——長崎画ながさきゑに出て来る紅毛人こうまうじんも皆同じ事ではありませんか？ あたしはあの人たちの顔を見てさへ胸が悪くなつて来る位です。

長崎画ながさきゑの英吉利人イギリス、法朗西人フランス、露西亞人等ロシアヤ、（驚きし如く）
 おお！ おお！

麻利耶観音、ではどうしてもあの方とは仲好く出来ないと言ふのですか？

阿蘭陀の女、当り前です。わたしはもう今日限りけふ、あなたとも御つきあひは御免蒙りませうごめかうむ。古伊万里こいまりの甲比丹かびたん、小柄こづかの伴天連ばてれん、

かめやまやき
 龜山焼の南蛮女、——いえ、いえ、それどころではありま

せん。刀の鐔つばにある天使でさへ、二度と口を利きいて貰ひますまい。

あの人たちとわたしとは生れも育ちも違ふのですから、——

麻利耶観音、（蘭人に）聞いてみたろうね？ わたしの言葉さ

へ通らないのだから、所詮しよせんお前の願ひはかなはないよ。

蘭人、（涕泣ていきふしつつ）はい、もう仕方はございません。

甲比丹かびたん、男らしくあきらめるさ。（龜山焼かめやまやきの南蛮女なんばんをんなに）

しかし憎い女だね。

南蛮女なんばんをんな、ほんたうに高慢な人です事。——ようございます

よ。これからはわたしがあの女の代りにこの方かたの世話をして上げますから。

伴天連ばてれん、お前さんは何時いつもやさしい人だ。

基督キリスト、静かに！ 静かに！ 誰か人間が来たやうだから、――

鸚鵡あうむ、しつ！ しつ！

この家の主人、数人の客と共に戸棚の外に立つ。

主人、これがわたしのコレクションです。

客の一人ひとり、大分沢山だいぶんたくさんにありますね。この江漢かうかんの蘭人は面白い。

主人、其処そこにあるのは亀山焼です。これはわたしの自慢の品で

すが、――

客の一人、南蛮女ですね。阿蘭陀出来オランダの皿の女より、余程美人よほど

ではありませんか？

主人、これですか？（阿蘭陀の女のある皿を取り出す）おや、何か濡れてゐるが、――

客の一人、まさか阿蘭陀の女が泣いたと云ふ訳でもありません。い。

客の他の一人、いや、悪わるぐち口を云はれたから、口惜くやし泣きに泣いたのかも知れません。（笑ふ）

客の一人、一体日本出来の南蛮物には西洋出来の物にない、独特な味がありますね。

主人、其そこ処が日本なのでせう。

客の一人、さうです。其こゝ処から今日こんにちの文明も生れて来た。将来はもつと偉大なものが生れるでせう。

客の他の一人ひとり、この蘭人や南蛮女も亦以て瞑めいすべしですか。――
 おおや！

主人、どうしたのですか？

客の他の一人、何だかあの基督キリストが笑つたやうな気がしたので
 す。

客の一人、わたしは麻利耶マリヤ観くわん音のんが笑つたやうに見えた。

主人、気のせるでせう。

主客しゅかく静かに硝子戸ガラス棚の前を去る。再びかすかにちやるめらの
 音。

(大正十一年五月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介作品集第三巻」昭和出版社

1965（昭和40）年12月20日発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月26日公開

2004年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

長崎小品

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>